

# 「人文社会・コミュニケーション系列」における 英語の授業の活性化と『イングリッシュ・キャンプ』の試み

人文社会コミュニケーション系列運営委員

外国語科 加藤敦子 工藤泰三

人文社会・コミュニケーション系列」は今年度4年目を迎えた新しい系列である。これまで各授業担当者は総合学科としての文系科目の在り方を模索してきた。一方、昨年度末には系列主催の初めての行事『イングリッシュ・キャンプ』を実施した。外国の村を再現し、スタッフに全員外国人を起用した疑似体験型研修施設を会場に、文字通り英語漬けの3日間を過ごした生徒達の変容ぶりについて報告する。

**キーワード：**イングリッシュ・キャンプ 疑似体験 学習意欲 授業の活性化

## 1 はじめに

「人文社会・コミュニケーション系列」（以下「人・コミ系列」）は、平成15年の系列改編に伴い、英国社の文系3教科と商業科を中心に立ち上げられた系列である。本校は従来職業教科中心の総合学科であり、各系列も職業教科を中心に編成されてきた。そんな本校にあって、「人・コミ系列」は初めて普通教科を前面に押し出して編成された系列である。大学進学希望者が増加しつつある本校において、「人・コミ系列」に寄せられる期待は大きい。

初年度の選択者数は系列全体で26名であったが、次年度には36名、3年目には46名に増加した。1学年に160名在籍しているので、約四分の一の生徒を引き受ける系列になり、「生物資源・環境科学系列」、「工学システム・情報科学系列」、「生活・人間科学系列」とともに本校の4つの系列の一つとして実質的に認知されるようになってきた。

他の系列の特徴は実習の多さにある。どの生徒も専門分野の実習に誇りを持って取り組んでいるように見える。

「人・コミ系列」でも「ビジネスモデル」には実習があり、生徒は喜々として取り組んでいるが、「人文モデル」にはほとんどなく、地味な印象を禁じ得ない。座学の授業も本来楽しいものであるが、子豚の出産に立ち会う感動や、自作のウエディングドレスを着てステージに立つ感動に比べると、単調で面白味に欠ける印象があることは否めない。いかに系列の魅力を高めていくかが、ひとつの課題となって浮上した。そこで、校外で実施するイングリッシュ・キャンプ（以下E.C.）を立ち上げることにした。

## 2 「人・コミ系列」の教育課程

「人・コミ系列」の学習モデルは「人文社会」と「ビジネス」の2つである（表1）。人文の分野に興味を惹かれて「人・コミ系列」を選択して来る生徒の中には、国語や文学に興味を持っている生徒もいれば、地理や歴史や政治に関心を持っている生徒もいる。また英語や外国文化に関心を持っている生徒もあり、他系列に比べて選択者の興味の幅が広いのが特徴になっている。そこで、2、3年次の系列必修科目は最低限にとどめ、各自の興味に応じて系列選択科目を選択させるように編成されている（表2）。しかし、この教育課程にも問題がないわけではない。それを明確にする一つの手段として、実際にこの系列で3年間学んできた第11期生36名を対象にアンケートを実施した。その結果、生徒の目線で捉えた問題点が浮かび上がってきた。

### 生徒が感じる「人・コミ系列」の教育課程の問題点

（複数生徒が指摘した問題点のみ抜粋して記載）

・系列科目の「Practical Reading」も「Communicative Writing I・II」も1、2年次必修の「英語I」「英語II」と大差ないので、「人・コミ系列」を出たら英語ができるようになったと思えるように、オーラル中心が実感できる科目やAETと話せる機会を増やしてほしい。  
(6人)

・2年次系列選択科目として「古典基礎」「古典I」、3年次系列選択科目として「古典II」があるが、古典の科目が多すぎると思う。商業系の科目には興味がな

表1

## 人文社会・コミュニケーション系列 モデルプラン

## 【人文社会 モデル】

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32
1 年次	数学Ⅰ				理科 選択	英語Ⅰ				情報 C				国語総合				地理 A				体育				芸術 選択	家庭 基礎	産社		産理	総合 LHR	
2 年次	理選 総理 A	英語Ⅱ				世界 史A		現代 社会		体育				保 健	起業 基礎	総 合	L H R	現代 文Ⅰ	古典 Ⅰ		古典 基礎	数学 A		CW Ⅰ		日本史B						
3 年次	体育	保 健	総 合	L H R	卒業 研究	現代 文Ⅰ		古典 Ⅱ		現代 評論				P.R				CW Ⅱ		ワ ー ル ド ・ ビ ジ ネ ス	表現 演習		生物 Ⅱ	古典 購読	現代 の 政経		音楽 Ⅱ					

## 【ビジネス モデル】

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	
1 年次	数学Ⅰ				理科 選択		英語Ⅰ				情報 C		国語総合				地理 A		体育				芸術 選択		家庭 基礎		産社		産理		総合 合		L H R
2 年次	理選 総理 A		英語Ⅱ				世界 史A		現代 社会		体育		保 健		起業 基礎		総 合		L H R	簿記				商品 と 流通		原価 計算		CW I		オーラル I		ビ ジ ネ ス ス キ ル	
3 年次	体育		保 健		総 合		L H R		卒業 研究		会計		マーケ ティ ング ・コ ミュ ニ ク		PR				商学 研究		ワ ー ル ド ・ ビ ジ ネ ス		やさ しい 法律		表現 演習		販売実践				商業 デザ イン		

表2

## 科目選択時間割表

## 【2年次】

曜日	時限	科目の種類	人文社会・コミュニケーション系列	
月	1	系列	古典基礎	
	2	指定・選択	商品と流通	
	34	必修		
	5	系列	数学 A	
	6	指定・選択	原価計算	
	7	総合的学習		
火	1	系列	現代文 I	
	2	指定・選択	簿記	
	34	必修		
	5	必修		
	67	起業基礎		
水	12	必修		
	3	系列	古典 I	
	4	指定・選択	簿記	
	5	LHR		
木	12	必修		
	3	自由選択		
	4	①		
	56	必修		
	7	必修		
金	1	自由選択		
	2	②		
	3	系列	CW I	
	4	指定・選択		
	56	必修		
	7	進路研究		

## 自由選択科目

- ① 世界の思想 B(4) 日本史 A 数学 II 化学 II スポーツ I オーラル I 生物 I
- ② 日本語表現 B(4) 日本史 II α 数学 I β 化学 I β 生物活用技術 製図 基礎図介 読解 スキル

## 【3年次】

曜日	時限	科目の種類	人文社会・コミュニケーション系列	
月	12	自由選択①		
	3	系列		
	4	指定・選択	現代文 II	会計
	5	系列		
	6	指定・選択	PR	
	7	進路研究		
火	1	系列		
	2	指定・選択	古典 II	会計
	34	必修		
	5	系列		
	6	指定・選択	ワールド・ビジネス	
	7	進路研究		
水	1	系列		
	2	指定・選択	CW II	商学研究
	34	自由選択②		
	5	LHR		
木	12	自由選択③		
	3	系列		
	4	指定・選択	PR	
	56	自由選択④		
	7	系列		
金	12	自由選択⑤		
	3	系列		
	4	指定・選択	現代評論	マーケティング・コミュニケーション Internet English
	5	総合的学習		
	67	卒業研究		

- ① 地理 B(4) 日本史 A 現代の政経 数学基礎 ①(4) リーディング実践(4) 販売実践(4)
- ② 古典講読 B(4) 世界史 II β 数学 III(4) 動物学入門(4) 簿記 やさしい法律
- ③ 表現演習 B(4) 地理 B(4) 世界史 III(4) 数学 III(4) リーディング ②(4) 簿記 マチ
- ④ 化学 II ティング II 音楽 II 美術 II 植物学 産業電 商業
- ⑤ 言語 コミュニク 演習 II 生物 I オール リーディング ①(4) リーディング ②(4) 販売実践(4)

かったので必然的に全部履修するしかなかった。内容的に重複しているところもあったように思う。

(5人)

・「ワールド・ビジネス」は系列必修科目になっているが、「人文モデル」選択者にとっては必要性を感じられなかった。系列選択にしてほしい。

(3人)

・商業科目は取るつもりがなかったので必然的に「数A」を取るしかなかった。他の科目を取れるようにしてほしい。(3人)

・「人・コミ系列」は筑坂(本校の略称)らしさに欠け、普通高校との違いを感じられない。「人・コミ系列」らしいことがなかった。(3人)

・座学中心の授業が多いので、もっとポジティブに活動したり、楽しみながら学ぶ要素がないと意欲が持続しない。(3人)

・「人・コミ系列」の名前の通り、コミュニケーション能力を高められる要素を取り入れてほしい。(2人)

・「Practical Reading」、「Communicative Writing」は系列必修科目になっているが、「ビジネスモデル」選択者の中には必ずしも必要ではない人もいる。系列選択にしてほしい。(2人)

・「人文モデル」の2年次の選択科目は国語系が多すぎる。なるべく偏らないようにしてほしい。(2人)

・社会の科目が系列必修にも系列選択にもない。社会や文化や思想をテーマにした授業を入れてほしい。(2人)

・2年次までに「数Ⅰ」「数A」「数Ⅱ」くらいは取れるようにしてくれないと一般入試には対応できない。(2人)

・英語の授業でLL機器をもっと利用したかった。(2人)

以上の結果から、次のようなことが読みとれる。

#### ① 時間割編成上の問題点

英国社と商業を合体して一つの系列を立ち上げたが、人文中心に履修している生徒は商業的な科目が必修であることを疑問視し、商業中心に履修している生徒は英語科目が必修であることを疑問視している様子がうかがえる。どちらかを中心に両方の要素を学べることに満足している生徒ばかりではないことがわかる。

また、系列選択科目のうち、商業以外の科目に国語が多い点や、社会が入っていない点や、必然的に数学を取らざるを得ない点について不満を感じている生徒も見ら

れた。その一方で、一般入試に対応できない時間割に対する不満の声もある。

#### ② 英語の授業内容に関する問題点

英語を学びたくて「人・コミ系列」を選択した生徒の多くは、文法や講読や作文の学習より、英会話を練習する機会を多く持つことにより英語力アップを図ることを望んでいる。

また、座学ばかりでなく言語活動やLL実習を通して、楽しみながら英語を身に付けることを望んでいる。英語の習得には文法理解や読解力や英文構築力が不可欠であると認識し、そちらに時間を費やしてしまいがちな授業者と生徒のニーズにギャップがある。

#### ③ 総合学科としての「人・コミ系列」の意義に関する問題点

系列の名称に反して、コミュニケーション能力を高める要素が、系列必修・選択科目に含まれていないと生徒は感じている。そして普通科の高校とは異なる総合学科としての「人・コミ系列」らしさを求めている。

さて、生徒達の興味関心の幅が広いのが「人・コミ系列」の特徴であることは既に述べた。

さらに、留意しなければならないのは本校の生徒の進路希望の多様さである。全生徒の約6, 7割を占める大学・短大進学希望者のうち、大半は推薦入試やAO入試を目指している。その一方、少数派ではあるが、センター利用で大学受験を目指す生徒もいる。その上、実質筆記試験無しで専門学校へ進学を決める生徒もいる。進路獲得の手段が異なれば、授業に求めるものも当然異なる。

この多様な生徒のニーズに応えるためにはどうしたらよいか、次の教育課程見直しの際の課題となろう。同時に、系列として、あるいは授業担当者として、改善できる点はどんどん改善していかなければならない。

### 3 「人・コミ系列」における英語の授業の活性化

様々な問題が内在する系列ではあるが、英語担当としては常に授業の改善に心を砕いている。そこで、今年度試みた取り組みについて以下に記す。

#### (1) Communicative Writing II (以下CWII) における活性化のための試み

## ①キーワード英作文

日本語でまとめた話をする際、流れに沿ったキーワードのみを記したメモの使用が有用である。全文を記したメモでは読み上げることになってしまうし、聞いている方々の顔を見ることができない。しかし、何も見ないと要領の悪い話になりかねない。そこでキーワードを頼りに話を進める手法が有効と成り得る。これを、コミュニケーションに必要な英文構築力を養成する科目である「CWⅡ」に応用してもまた有効ではないかと考えた。

今年度、「CWⅡ」では東京書籍の『PROMINENCE English Writing』を教科書として使用した。ライティングの教材なので、本文は理解しやすい英文で構成されている。

### Lesson 9 Do You Like Natto?

Do you like natto, fermented soy beans? It is a very healthy food containing a lot of vegetable protein and important vitamins. It is true that natto is smelly and sticky and that the color is not at all appealing. But scientists say natto helps stop cancer and prevent heart attacks and strokes. In addition, it is cheaper and more healthy than the fast foods that many Japanese eat today. In fact, it is one of the best foods in the world.

このような教材に対して、通常の指導を行った後、キーワード英作文の指導を行った。ここで言う通常の指導とは、本文の内容を簡単な英語で口頭導入し、理解度を確認した後、英文に目を通させ、単語や文法等の解説を行い、音読練習を行う指導である。そしてこの後キーワード英作文に移行していく。

まず、音読練習でオーラル・イメージが残っているうちに、英文の基本的な形を意識させるためにS,Vを空欄にしたプリントを使って音読練習をさせた。この時生徒はペアになり、片方がS,V抜きプリントを見ながら音読をし、片方が教科書を見ながらその補助をする態勢を取った。

次にS,V以外の重要な語句を抜いたプリントで同様の活動を繰り返させた。

そして、仕上げにキーワード英作文を行う。

・それ(納豆)は植物性タンパク質と大切なビタミンをたくさん含んでいる非常に健康的な食品です。

healthy, contain, protein, vitamin

前段階の活動同様ペアになり、片方がキーワードのみを記したプリントを見ながら英文を口頭で再現し、片方が完全な本文を見ながら確認役にまわる。

これを何度か繰り返し自信をつけたあたりで、ペアを教室の端と端に配し大きな声でキーワード英作文を行わせる。ここまで来ると生徒は吹っ切れたようにケラケラ笑いながらこの活動を行う者が多くなる。中にはキーワードに頼らずも英語を口にできる生徒も現れ、教室は活気に満ちていく。

効果を検証するために、「リーディング」履修生徒を対象に、同じ本文を教材に通常の指導のみを行った。そして翌週定着を図るために、「CWⅡ」のクラスでは音読練習、SV抜き、重要語句抜き、キーワード英作文を再び行い、「リーディング」のクラスでは音読練習を色々なバリエーションを付けて充分行った。次に、両生徒群に対してさらに1週間おいて、日本語とキーワードから本文を再現する筆記テストを行い、以下の結果を得た。

再現できた英文数	CWⅡ 24名	リーディング 36名
0	0 %	19 %
1～2	13 %	67 %
3～4	37 %	14 %
5～6	50 %	0 %

ここで言う「再現」とは、本文とそっくり同じ言い回しでなくとも、日本語が表す内容を理解可能な英文で表していることを指す。その際、2文に分けた文もよしとした。また、スペルのミスや名詞の単複等文構造に関わらないミスには目を瞑った。

かなり極端な結果が得られたが、実験群は統制群の約2倍の時間をかけている上に、実験群は人文系に興味を持っている生徒であるのに対し、統制群はそれ以外の生徒が大半であることを差し引いて考えなければならない。それにしても、キーワード英作文にはかなりの効果があると思われる。

キーワードを利用した英作文の指導事例は既に報告されているが、今回得られた結果に生徒の反応を考え合わせると、さらに発展させていきたい指導方法である。

## ②リテリング

リテリングとは聞いたばかりの英語を、すぐ口頭で再現する活動である。従って、教材になる英語は平易で分かり易いストーリーが適している。

## 課題文 1

Yoko worked as a volunteer at a kindergarten last week. There was a lot of work to do, but she felt happy being with the children. She used to want to be a nurse, but now she know that it is a kindergaten teacher that she wants to be in the future.

上記のような課題文をもう一種類用意し、2人組の片方に課題文1を、もう片方に課題文2を与え、まずは音読の準備をさせる。

次に、課題文を相手が理解できるように読み上げさせる。相手に伝わらなければ用を成さない音読は、生徒が自分の責任を自覚して真剣に取り組む分、意識の面で大いに意義がある。

そして、すぐにLL機器を使って聞き取った内容を英語でリテルさせ、録音させた。

再現すべき内容は、課題文1の場合

- ・幼稚園でボランティアをしたこと
- ・やることがたくさんあったこと
- ・子供たちと過ごせて楽しかったこと
- ・以前は看護婦志望だったこと
- ・幼稚園教諭を志望するようになったこと

課題文2についても同様に、5つの内容を理解可能な英語で表せているかを見た。

さらに、同じ「CWⅡ」履修生徒24名に対して、全く同じ活動を全て日本語で行い、以下のデータを得た。

再現できた内容	英語	日本語
0	42%	0%
1	21%	0%
2	21%	0%
3	12%	8%
4	0%	21%
5	4%	71%

日本語での再現率が高いのは、記憶力が障害にはなっていないことを示している。問題は即座に英語を理解することができない点か、英文を構築できない点にある。今回一回分のデータしか取っていないので、次年度はこれを複数回行いその変化を測定し、この活動が英語によるコミュニケーション能力の育成に有効であるかを検証していきたい。

## (2) Practical Readingにおける活性化のための試み

## ①通訳練習

リーディングは読んだ内容を理解していく活動であり、リスニングは聞いた内容を理解していく活動であると捉えれば、英語の内容を把握する点が共通していることになる。リーディングの授業は生徒にとって最も単調であると感じさせやすい科目なので、内容把握という共通項のある通訳練習を行い変化を持たせた。

まず、リーディングの教材よりは難易度の低い英文を2種類用意し、2人組になった生徒それぞれに別々の課題を与え、音読の準備をさせた。

次に、相手に向かって課題文を読み上げさせ、1文ずつ読み終わったそばから口頭で日本語に直させた。

教育課程に関するアンケート結果にも表れていたように、こうしたオーラルの要素を取り入れた活動は概ね生徒には歓迎された。

## 4 イングリッシュ・キャンプの試み

### (1) 実施までの経過

昨年度、系列運営委員会では系列の魅力を高める方策について思案してきた。経済的負担を最低限に抑え、安全面で極力心配のない系列独自の行事を組めないか検討した結果、福島県にある疑似体験型研修施設ブリティッシュ・ヒルズにおいて「イングリッシュ・キャンプ」(以下E.C.)を実施することにした。ブリティッシュ・ヒルズはイギリスの昔の村を忠実に再現した疑似体験型研修施設である。講師もその他のスタッフも全員ネイティブ・スピーカーという理想的な環境が整っている。

### (2) E.C.概要

約3ヶ月前に1年次生中心に20名募集したところ、ほぼ募集枠の人数が集まり、最終的には21名での実施となった。「人・コミ系列」の生徒が多かったが、人数の関係で他系列からの参加も受け入れることにしたところ、参加生徒は成績上位者がその大半を占めた。

・参加生徒の内申の平均 : 4.0

・A評価(4.3以上)生徒 : 9名

系列の魅力を高めることを追求してE.C.実施にこぎ着けたわけであるが、学校全体の英語学習への意識付けに繋がる可能性があることもわかった。

E.C.への不安を減らし意欲を高める目的で、約1ヶ 備えた。(E.C.の概要については別枠に記載)  
月前から3回ほどオール中心の事前授業を組み本番に

### イングリッシュ・キャンプ実施要項

#### 人文社会・コミュニケーション系列

- 1 期日 : 平成18年3月23日～25日(2泊3日)
- 2 場所 : ブリティッシュ・ヒルズ(疑似体験型研修施設)  
福島県岩瀬郡天栄村大字田良尾字芝草1-8
- 3 対象生徒 : 1年次生で人文社会・コミュニケーション系列を選択した生徒  
(それ以外の系列選択者は応相談)
- 4 目的 : 本格的に選択科目の授業が始まる2年次1学期の直前に、イングリッシュ  
キャンプを行うことによって、人文社会・コミュニケーション系列の選択  
者としての自覚を高めるとともに、系列必修科目や系列選択科目の学習に  
対するモチベーションを高める。
- 5 内容 : 外国人講師による授業と外国生活疑似体験
- 6 行程 :
 

1日目	新白河集合	—————	BH着	英語研修
	11:15		BH送迎バス(11:30発)	12:30
2日目	終日英語研修			
3日目	英語研修	BH	—————	新白河解散
		13:00		14:00

#### 7 研修日程

Thursday 23 March	Friday 24 March	Saturday 25 March
	7:30 Breakfast	7:30 Breakfast
	9:00-10:30	Check out & Store Luggage
12:30 Arrive at British Hills Check in & Orientation Adventure Game Transfer to Rooms	Lesson2: Talk about Yourself 11:00-12:30 Lesson3: Pronunciation Skills	9:00-10:30 Lesson6: Speech Skills
	Lunch	Free time
16:00-17:30 Lesson1: Survival English	14:00-15:30 Lesson4: A Day Abroad	Lunch
Guide to Dining	16:00-17:30 Lesson5: Cooking / Snooker	Closing Ceremony with certificates
Dinner	Dinner	13:00 Depart by bus
Free time	Free time	

(3) アンケート結果の分析とキャンプの成果、ならびに  
今後の課題

E.C.を通して生徒の意識がどのように変容したかを知り、かつ今後の実施に向けて改善点を探るために、参加した生徒にアンケートを実施した。アンケート項目と回答結果は以下の通りであった。なお、質問1①・2・3は最も肯定的な回答を5点、最も否定的な回答を1点として5段階で回答してもらったものの平均を、質問1②・質問4については記述されたコメントのうち各項目にあてはまるコメントを書いた人数(19名中)を示している。

1. ①E.C.は楽しかったか・・・5.0

②楽しかった点は何か(「すべて」「授業」という回答は除いてある)

- ・外国人(講師・スタッフを含む)とのコミュニケーション・・・12名
- ・自由時間・・・7名
- ・スヌーカー・・・3名
- ・プールなどの施設・・・3名
- ・発音の練習・・・2名
- ・いつもと違う体験・・・2名
- ・クッキング・・・2名
- ・授業内のゲーム・・・2名
- ・異文化理解・交流／食事／散歩／買い物・・・各1名

2. E.C.に参加する前と比べて変わった点は何か

- ・英語を聞く力が伸びた・・・4.6
- ・英語を話す力が伸びた・・・4.5
- ・英語を読む力が伸びた・・・4.1
- ・英語を書く力が伸びた・・・3.8
- ・文法力が伸びた・・・3.9
- ・語彙力が伸びた・・・3.9
- ・英語を話そうとする態度が伸びた・・・4.7
- ・英語学習への意欲が増した・・・4.6

3. E.C.のそれぞれの授業はどうだったか

- ・Survival English・・・4.9
- ・Talk about Yourself・・・4.8
- ・Pronunciation Skills・・・4.8
- ・A Day Abroad・・・4.5
- ・Cooking・・・5.0

4. 感想(自由記述)

<肯定的な感想(2名以上の回答があった項目)>

- ・「また行きたい」・・・13名
- ・「英語(学習)に対する意識・意欲が向上した」・・・10名
- ・「英語を使うことの不安が小さくなった(なくなった)」・・・9名
- ・「講師の質・人柄がよかった」・・・4名
- ・「食事がよかった」・・・4名
- ・「英語の知識・能力が向上した」・・・3名
- ・「自由時間にも外国人と交流できてよかった」・・・2名

<否定的な感想・改善点など(2名以上の回答があった項目)>

- ・「参加可能人数を増やすべき」・・・2名
- ・「短すぎる」・・・2名

以上の結果から、このキャンプの成果として次の点を挙げることができる。

① このキャンプは、生徒に外国人とのコミュニケーションの機会を与えることによって、楽しく英語を学習する機会を生徒に与えることができた

質問1①に対し全生徒が「楽しかった」と答え、またその理由として「外国人とのコミュニケーション」を挙げている生徒が12名(全回答の63.2%)と群を抜いて多いことから、外国人と実際に英語を用いてコミュニケーションをとることが生徒に「楽しい」と感じさせる大きな要因になっていることがわかる。

② このキャンプは、生徒たちの英語または英語学習に対する態度・姿勢・意欲をより肯定的に変容させることができた

質問2において、態度や意欲に関して肯定的な意見が多かったこと、また自由記述の感想の中にも「意識・意欲の向上」「不安の減少」を挙げた生徒が半数以上に上ることから、このキャンプが特に英語学習に対する生徒の意識面に効果的に働いたことがわかる。

③ このキャンプは、生徒の英語運用能力を向上させることができた可能性がある

質問3において、自らの英語運用能力について「向上した」「少し向上した」と答えている生徒がほとんどであった。このことから、このキャンプが生徒の英語運用

能力の向上に大きく寄与した可能性があると言える。しかしながら、キャンプ実施前と実施後の英語運用能力の変容を客観的に測るデータがないこと、また自由記述の感想の中で自身の英語に関する知識・能力の向上に触れたものが3名と少なかったことから、これについては断言することはできない。

このアンケート結果を踏まえ、今後E.C.を実施する上での課題を考えてみたい。

まず考えられることは、実際に生徒の英語運用能力にこのキャンプがどの程度寄与するのかを測定する機会を設けるべきであるということである。本校では1年次全員に英語運用能力評価協会のBACEを4月と12月に受験させているが、E.C.実施時期を挟んで実施していないので、そのデータを指標として用いることはできない。したがって、E.C.参加者に何らかのテストをE.C.実施前と実施後に受験してもらうなどの手段が必要である。

次に、実施期間の問題がある。「期間が短すぎる」と記述した生徒は2名と少ないが、「また行きたい」「あっという間に時間が過ぎてしまった」などのコメントが非常に多かった。むやみに期間を長くすればよいというものでもないが、長くすることでより高い効果をもたらすことができる可能性は高い。

第三に、通常の授業との関連について考えると、E.C.を通して英語学習に対する意識・意欲が向上していること、あるいは外国人とのコミュニケーションによって英語学習あるいは英語を使うことが「楽しい」と感じられていることから、日頃の授業ではそのような効果を十分与えられていないことを示しているとも言える。教員の数や教育課程などの物理的な要因のために容易に改善できることではないが、与えられた環境の中で可能な限り「英語を使う」「外国人と英語でコミュニケーションをとる」といった体験をさせる機会をさらに増やし、より多くの生徒に英語学習に対する積極的な姿勢を持たせるための手法を考えていかなければならない。さらには、通常の授業の中でE.C.との関連を意識させることで、生徒の心理的変容をより大きなものへ高めることができるかもしれない。

## 5 おわりに

参加生徒にとってE.C.は極めて特異な体験だったようである。E.C.直後に書かせた生徒の感想文には高ぶる気

持ちがよく表れている。以下は生徒の感想文である。

「夢のような3日間が終わり、時差ぼけの代わりに英語癖がついてしまいました。帰路につき、新白河の駅で駅員さんに「この電車に乗るにはどのホームに行けばいいのですか」と聞こうとすると、自然と頭の中で"Where is～"と英語に訳している自分がいました。以前外国でホームステイして帰国したときも、ついつい"Sorry." "Thanks."と連発してしまったことがありましたが、その時と同じ感覚です。E.C.は限りなく外国に行った感覚に近いものを私たちに与えてくれたと感じています。

E.C.で得たもの、それは『英語は楽しい』ということ。以前から英語は大好きでしたが、益々大好きになりました。しかし同時にまだまだ勉強が足りないということを感じさせられました。もっと英語を勉強をして、英語力を向上させたいと思います。」

さらに、『高校生のための英語習得法』というテーマで卒業研究を行った生徒は、論文の最後をこう締めくくっている。

「参加生徒のE.C.前・後の英語に対する意識には大きな変化が見られた。英語学習に対する意欲が高まった参加者が大半で、中には英語に対する苦手意識がなくなった人もいた。こうした意識の変化から、英語を学び習得していくには何よりも精神的な支えが必要であることに改めて気づかされた。英語学習の精神的な支えとは『英語を勉強したい』という意欲であり、『英語を話すことは楽しい』という気持ちであると私は考える。」

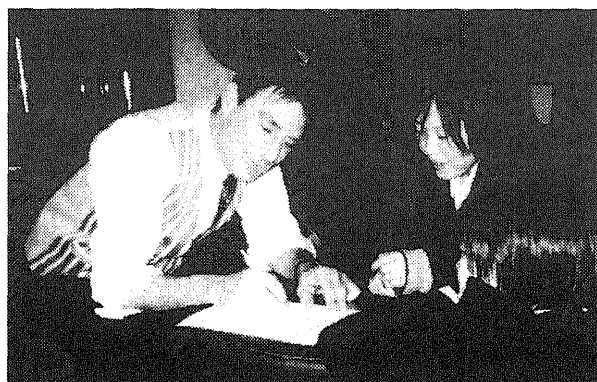
E.C.が生徒の英語力向上にどの程度寄与したかは不明であり今後の検証が望まれるところであるが、生徒を学習に向かわせる意識の面で絶大な効果があったことは確かなことである。

これからも日々の授業の改善とE.C.の継続に尽力し「人・コミ系列」の発展に寄与したい。





Survival English授業風景  
気さくな講師に緊張も和らいだ様子の生徒



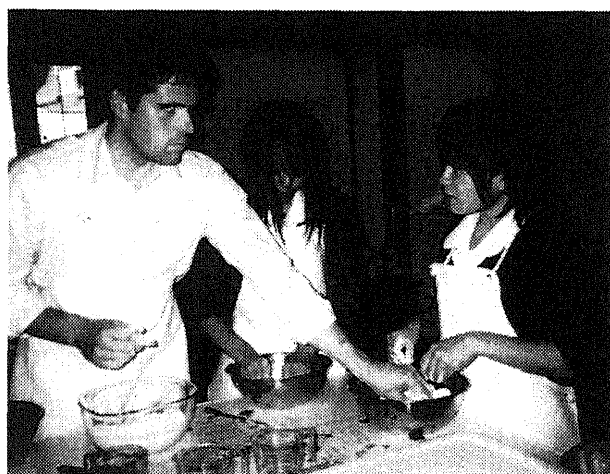
自由時間の風景  
自由時間を利用して、スタッフに卒業研究のための  
インタビュー調査を行う生徒



Talk about Yourselfの授業風景  
時に口頭で、時に机上で、変化の多い授業



自由時間の風景  
厨房にいるスタッフにまで手伝いを申し出る  
積極的な生徒



Cookingの授業風景  
カルチャー講座はスヌーカーとクッキングの選択制



自由時間の風景  
仕事を終えたスタッフとの語らいの時